

## エドワルト・フォン・ハルトマンとニーチェ

菅野孝彦

フリードリッヒ・ニーチェの後期思想<sup>1</sup>における思想的特質を探るにあたって、『力への意志』の著作がテキストとして適切かどうかを明らかにするために、これまで私は、グロースオクターフ版(Grosstaktausgabe)、『力への意志』所収の断片と、

それに対応するグロイター版(Kritische Gesamtausgabe)における断片との異同を比較検討してきた。その結果、彼の後期思想を研究するためのテキストとして『力への意志』を認めるには、ちゅうちよせざるを得ない幾つかの問題点が生じた。<sup>2</sup>それらの問題点の一つが、エドワルト・フォン・ハルトマンに対するニーチェの言及をめぐる問題である。すなわち、『力への意志』ではハルトマンに対する言及が、第七八九断片のみに見られるのであるが、グロイター版に基づいて『力への意志』に対応する断片を調べると、そのほかにも三つの断片が、本来ハルトマンについて言及していることがわかる。つまり、これらの三つ

の断片においては、ハルトマンへのニーチェの言及が、『力への意志』の編者によって「削除」<sup>3</sup>されているのである。また、『力への意志』で唯一ハルトマンに言及している第七八九断片に関しても、「移動」という形で、変更が施されている。

そこで本稿は、まず第一に、ハルトマンに対するニーチェの言及に関して、『力への意志』において異同の伴っている個所を明らかにし、その本来の形(グロイター版での対応する断片)を提示する。次いで、こうした資料的確認に基づいて、ハルトマンに対するニーチェの言及が、どのように為され、またそれが、ニーチェの思想展開において如何なる意味をもつのかを考察する。<sup>3</sup>以上の二点が本稿の課題となるが、それらの考察の前に、ハルトマンの哲学について述べておこう。

## 一 エドワルト・フォン・ハルトマンについて

エドワルト・フォン・ハルトマン(一八四二—一九〇六年)は、まさしくニーチェの同時代人といえる。彼は、大学において教鞭をとることはなかったが、『無意識者の哲学』(一八六九年)『道德意識の現象学』(一八七九年)『ペシミズムの歴史と基礎づけ』(一八八〇年)『宗教哲学』(一八八一—八二年)等の著作を著した。特に、『無意識者の哲学』によって、彼の名は、一躍知られるようになったが、その哲学は、一九世紀哲学思想の流れにおいて、以下のように位置づけられよう。ハルトマンの「無意識者」(Das Unbewusste)は、シェリングが自然哲学以来自らの哲学的核心とみなす無意識の概念に基づいている。そしてハルトマンは、この「無意識者」の概念の中に、ヘーゲルの理性哲学とショーペンハウアーの意志哲学の総合を試みたといえる。したがってこの「無意識者」は、深層心理学的な無意識と混同されてはならないのであり、それは絶対者・超越的な存在者となる。すなわち、一九世紀中葉ヘーゲルによって産み出された体系哲学に対して唱えられる様々な異議のもと、ハルトマンは、いわばこうして位置づけられる「無意識者」を根底とする哲学体系の樹立を企図したのである。ハルトマンの哲学に対して、ニーチェは批判を行うのであるが、ハルトマン哲学の全貌それ自体について語ることは本稿の目的ではないので、ここではハルトマン哲学における「幻想(Illusion)の三段階説」、及びそれに関連する「世界過程(Weltprozess)説」につ

いて簡単にふれておこう。「幻想の三段階説」は、人間の幸福(Glück)と幻想の関係について語っている。「幻想の第一段階」は、「古代—幼年期」であり、そこでは幸福が、現在の世界の発展段階において到達され、したがって個人にとってそれは此岸において到達される、という幻想が支配的となる。<sup>(7)</sup>「幻想の第二段階」は、「中世—青年期」であり、幸福は個人にとって、死後の超越的生において到達されうる、と考えられる。さらに「近代—壮年期」である「幻想の第三段階」では幸福が世界過程の未来にあると考えられる。かくして「幻想の三段階説」は、第一段階が、此岸への絶望—古代の悲劇的世界、第二段階は、彼岸への絶望—キリスト教世界、そして第三段階が、幸福への絶対的諦念—ショーペンハウアーの世界観といえよう。ハルトマンは、実践哲学の理念によってこうしたペシミズムの状況を克服しようとする。彼は、次のように語る。「われわれは、無意識の哲学が実践哲学の基底を形成する唯一の原理を獲得する点に到達する。幻想の第一段階に関する真理は、現前する此岸に対する絶望であり、幻想の第二段階に関する真理は、彼岸に対する絶望である。そして幻想の第三段階に関する真理は、積極的な幸福に対する絶対的諦念であった。これらの立場は、みなたんに消極的であるが、しかし実践哲学と生は積極的立場を必要とする。そして、それは世界過程の目標、普遍的世界救済のために世界過程の人格に対する完全な帰依である(もはや、幻想の第三段階におけるように、世界過程のあり方において、積極的に幸福に与ることを希望するのではない)。別言すれば、

実践哲学の原理は無意識者の目的を自らの意識の目的となすことにある。<sup>30)</sup>すなわち、ハルトマンの哲学は、「幻想の三段階」における生へのペシミステイックな態度ばかりでなく、「幻想の第一段階」的な生へのオプティミズムをも、世界過程に対する完全な帰依によって乗り越えようとするのである。ハルトマン哲学の特質、特にニーチェによるハルトマンへの言及に関連するその特質は、以上である。

## 二 『力への意志』におけるハルトマン批判の整理

次に、本稿の主題の一つである、グロースオクターフ版『力への意志』におけるニーチェのハルトマンに対する言及を考察する。グロースオクターフ版『力への意志』では、第七八九断片のみがハルトマンについて言及している。しかし、すでに述べたように、グロイター版と比しそこには若干の異同が見られる。そこで、『力への意志』第七八九断片に対応するグロイター版の断片[206] (III)に基づいて、その異同を指摘する。「われわれ解放された精神が、感じるようになるならば、すなわちわれわれは目的の体系に閉じ込められていないという感じをもつならば、そこにはどれだけの自由の感情があることになろう。同様に、報いと刑罰という概念は、生存の本質に基づいているわけではない、という感情をもつならば、また、善行も悪行も、善や悪と呼ばれるのはそれ自身からではなく、ある種の人間の共同体の自己保存の傾向である遠近法によるにすぎないことを

感じるならば、さらに、快と苦についてのわれわれの総計が決して宇宙的な意義を持つていてではなく、まして形而上学的な意義など持っているわけではないことを感じるならば、そこにはどれほどの感情があることになるであろう。もしこのペシミズムが、ベルリンの人間の悪い冗談にすぎないとしてだが、生存そのものに伴う快・不快を秤量しようと試みるあのペシミズム、前コペルニクスの狭隘な視野へと意図的に自己を幽閉するあのペシミズムは、時代遅れの退行である。(エドワルト・フォン・ハルトマン)」

このグロイター版原文に対して、『力への意志』ではまず「われわれの新しい〈自由〉」という表題が付加されている。また、「エドワルト・フォン・ハルトマン」の語が移動され、「生存そのものに伴う快と不快を秤量しよう」と試みるあのペシミズム」と同格の位置に置かれる。さらに、「生存そのものに伴う快と不快……」以下が括弧に入れられて表記されている。これらの異同からのみで結論づけることは、早計にすぎるのであろうが、『力への意志』の編者が、敢えて「われわれの新しい〈自由〉」という表題を与えたことから明らかなように、またペシミズムに対する言及部分を括弧に入れたことから明らかなように、断片に対する編者の力点は、少なくともハルトマンのペシミズム、あるいはペシミズム一般の問題には置かれていないように思われる。

次に、本来なされているハルトマンの言及が『力への意志』では削除されてしまった例を取り上げてみよう。それらは、『力

への意志』の断片第九一番、第四二二番、第七〇一番の三片である。断片第九一番に対応するグロイター版の断片は、88[15] (三)である。「ドイツのベシミズムについて」暗鬱化が、ベシミズムの傾向が、啓蒙の結果として必然的に到来する。一七七〇年頃、すでに快活さの減少がみられた。婦人は、常に特に味方するあの女の本能で、不道徳に責任があると考えた。ガリアーニは、はつきりといった。彼は、ヴォルテールの詩句を引用している。――ところで私が、ヴォルテールや彼より深い人間であったガリアーニよりも啓蒙に先んじているとすれば、私は暗鬱化においてきわめて先行していることも当然であろう。そして私は、一種の遺憾の意をこめて、ショーペンハウアー的ベシミズムの、レオバルディ的ベシミズムのもつドイツ的狭隘さと非一貫性に対して、その最も原理的な形式を探し求めた(「アジア」)。私はエドワルト・フォン・ハルトマンをベシミズムを先の先まで考えた者とみなさない。彼は、むしろ好ましい作家等々であるにすぎない。しかし(私の『悲劇の誕生』の)かしこから響いてくるような(神も道徳もなしに)一人で生きるという、極端なベシミズムに耐えるためには、私は、それと正反対のものを考えねばならなかった。なぜ人間だけが笑うのかを最もよく知っているのは私であろう。人間だけが、笑いを作り出さねばならぬほどに深く苦しむのである。この不幸で憂鬱な動物こそが、当然最も快活な動物なのである。」

『力への意志』では、第一にこの断片の表題である「ドイツのベシミズムについて」が、削除されている。第二に、『力へ

の意志』では「彼はヴォルテールの詩句を引用している。」の後にヴォルテールの詩句として、「陽気な怪物は、退屈な感傷家よりもまし」が付加されている。異同の第三は、『力への意志』の編者が、「私はエドワルト・フォン・ハルトマンをベシミズムを先の先まで考えた者とみなさない。彼は、むしろ好ましい作家等々であるにすぎない。」というハルトマンへのニーチェの言及を削除している点である。『力への意志』における同様な削除の例を他の二片の中にも見出すことができる。

『力への意志』第四二二断片には、グロイター版の88[14] (三)が対応する。「哲学者に関する迷信、科学的な人間の取り違え。価値というものが、事物の中に潜み、それを確認すればいいかのようなのである。どれほど彼らが、既存の価値の支配のもとで研究するのであろうか(仮象、肉体等に対する憎悪)。道徳に関しては、ショーペンハウアー(功利主義に対する嘲笑)結局この取り違えは、ダーウイン主義を哲学とみなすまで進んでいく。今や科学的人間が支配する。テーヌのようなフランス人も、価値の尺度を持つことなく探求し、あるいは探求したいと思っている。事実への屈服が、一種の礼拝となる。実際、彼らは、現存する価値評価を絶滅させている。こうした誤解の説明。命令者は、稀であり、自らを誤解する。人々は権威を拒否し、状況の内に自らを置こうとする。ドイツでは、批判者の評価は覚醒した男性的なものの歴史に属している。レッシングその他(ゲーテに関するナポレオン)。実際にはこの運動は、ドイツロマン主義によって再び後退した。そして、あたかもロマン派によつ

て懐疑の危険が取り除かれ、信仰が証明されるかのように、ドイツ哲学の名声が、ロマン派に負うのである。ヘーゲルにおいて二つの傾向が頂点に達する。基本的にヘーゲルは、ドイツ的批判主義の事実と、ドイツロマン主義の事実とを普遍化したのである。——一種の弁証法的宿命論だが、精神を讃えつつ、実際には哲学者の現実への屈服を伴って。——批判者は、準備するのみで、それ以上ではない。相変わらず幸福主義の支配のもとでだが、ショーペンハウアーとともに、問題は価値の決定にあるという哲学者の課題が明らかになってくる（ハルトマンへの嘲笑）。ペシミズムの理想。」

『力への意志』では、35[4] (III)の末尾にある「ハルトマンへの嘲笑」の語が削除されてしまっている。このことにより、削除部の前に置かれている幸福主義 (Eudaimonismus) やその後が続くペシミズムと、ハルトマンとの結び付きが隠されてしまう。

本来、ニーチェのハルトマンに対する言及となる『力への意志』第七〇一断片には、グロイター版 II[6] (III) が対応している。「不快の総計は、快の総計を凌いでいる。したがって、世界は、存在するよりも存在しないほうがいい。」世界は、合理的には存在しないはずの何かである。なぜなら、世界は、感覚の主体にとっては快よりも不快を引き起こすからである。こうした饒舌が、今日ペシミズムと呼ばれる。快と不快は、副次的であって原因ではない。それは、ある支配的価値から導き出されるにすぎない第二級の価値判断である。すなわち、感情の形

式によって語る〈有用〉〈有害〉であり、徹底的につかのまの従属的なものである。なぜなら、全ての〈有用〉〈有害〉においては、相変わらず非常に多くの何のためにが問われねばならないからである。私は、このような感受性のペシミズムを軽蔑する。このペシミズムは、それ自体生が貧困化している徴候である。私はハルトマンのような瘦せた猿が〈哲学的ペシミズム〉について語るのをけっして許さない。」

『力への意志』では、この II[6] (III)断片から、末尾にあるハルトマンへの批判「私はハルトマンのような瘦せた猿が〈哲学的ペシミズム〉について語るのをけっして許さない。」が、削除されている。以上の指摘によって、ニーチェとハルトマンとの関係を考えるにあたっては、『力への意志』の著作に基づいては不十分であることが理解されると思われる。さてそこで、次に、本稿の第二の主題である、ハルトマンへのニーチェの言及とニーチェ自身の思想展開との関わりについて考えてみよう。

### 三 ハルトマンに対するニーチェの言及

ニーチェによるハルトマンへの言及は、けっして数多くない。周知のように、ハルトマンに対するニーチェの言及においてまず取り上げねばならないのは、『反時代的考察』第二編生に対する歴史の利害についてである。ここでは、ハルトマンを歴史主義の急先鋒とみなすニーチェの批判が展開されていると、

通常理解されている。次にハルトマンへの言及がみられるのは、『悦ばしき知識』「第五書われら怖れを知らぬ者」においてである。しかし、この第五書は、ニーチェ思想の中期の著作『悦ばしき知識』に収められているとはいえず、『悲劇の誕生』に「自己批判の試み」を、『人間のな、あまりに人間のな』には新しい序文を付け、版を改めていた時期一八八六年に書き上げられているのであり、ニーチェ後期に属しているといえよう。他の著作では、『善悪の彼岸』、『偶像の黄昏』にハルトマンに対する言及がみられるにすぎない。また、もちろん先の『力への意志』の断片に対応するグロイター版断片にも同様の言及をみることが出来る。以上が、ニーチェの著作におけるハルトマンへの言及である。こうして見ると、『反時代的考察』「第二編生に対する歴史の利害について」(一八七四年)から、次にハルトマンへの言及がみられる『善悪の彼岸』の出版(一八八六年)までは、ほぼ十余年の空白がある。この空白を経ることににより、ハルトマンに対するニーチェの言及は変化を蒙るのであるうか、あるいはまた、ニーチェの言及に変化が見られるとしたならば、そこにニーチェ自身の思想上の変化を見出すことはできないであろうか。たしかに明確なニーチェの思想的変貌を捉えるには不十分であるうが、以下、こうした観点から考察を進めたい。

(一)『反時代的考察』「第二編生に対する歴史の利害について」において

ニーチェによるハルトマンへの言及は、この『第二編生に對

する歴史の利害について」の第九節を中心にしてみられる。そこには、二つの点からのハルトマン批判がなされているように思われる。この批判の第一の点は、「世界過程説」や「幻想の三段階説」にみられる一種の發展史観に対する批判である。自らの時代を「壯年期」と呼ぶハルトマンに対し<sup>12)</sup>、「卑俗さへの發展を、壯年期への發展と呼ぶことができない。」と語り、ニーチェはハルトマンを批判している。ここでニーチェは、ハルトマンの「幻想の三段階説」を批判する。「幻想」とは、未知の事柄についての表現にすぎない<sup>13)</sup>、と語りつつ、「われわれの説は、意識はより高い幻想によつてのみ、促進され發展する、というものである。したがって、われわれの意識は、(例えば、ギリシア人と比較するならば)きわめて低次にならう。なぜなら、われわれの幻想そのものがギリシア人の幻想よりも低次にあるから<sup>14)</sup>」と続ける。「幻想」の語に対するハルトマンの消極的な姿勢と、ニーチェにおけるそれへの積極的な意味づけとの差こそあれ、また「幻想」に対するその相違こそが重要なのであるが、ここに「自らの時代」を發展とはみなさないニーチェの視点を如実に見ることができよう。とはいえず、このニーチェの視点をたんにギリシアへの回帰とみなすことも早急であろう。言い得るのは、自らの時代・現在を歴史の頂点と考える發展史観へのニーチェの異議である。ニーチェは、こうした發展史観に対して、「ヘーゲルの世界過程は、大きな警察力を持ったプロシア国家に迷い込んでしまった。これは、偽装された神学である。ハルトマンの場合もそうである。しかしわれわれは、

始めや終わりを考える能力を持っていない。したがって、こうした発展はそのままにしておこう。」と否定的に語っている。また「歴史を青年期・壮年期・老年期と平行関係にあると考えるに反対する。これには、一片の真理も含まれていない。」と語る。そして、自らの時代を歴史の頂点とみなす発展史観の展開に、ニーチェは近代人の倨傲を見るのである。「近代人は、世界過程のピラミッドの頂上に立っている。そこに認識の要石を置いて、耳をそば立てている周囲の自然に向かってこう叫んでいるかのようだ。『われわれは、自然に到達した。われわれが、目標そのものであり、完成された自然である。』自然を支配しようとする近代人のこうした倨傲は、歴史における、より正確には歴史哲学における歴史の試みとなる。「無制限の歴史感覚を制御することが必要である。確かに、実際ある種の制御が存在している。しかし、これは、必要でないもの、すなわち至るところに自己を求めそしてこれを発見すると信じ、歴史を自分の寸法に合わせて卑小化するところの無味乾燥で画一化した時代精神による制御である。このような卑小化が、キケロ(モムゼンによる)、セネカ(ハウスラートによる)、ルター(プロテスタント協会による)等に見られる。別の仕方では歴史を制御し打のめすのが、ヘーゲルである。なぜなら、彼は、歴史的発展の最高最終の段階に立っていると信じ、自分こそ時代を秩序づける精神であり、一切の過去を所有していると感じているからである。現在を最高のものと把握しようという試みは、すべて現在を荒廃させる。なぜなら、歴史のもつ規範としての

意義を否定してしまうからである。その最も恐るべき定式は、ハルトマンのいう世界過程への帰依である。」

第二の批判点も、以上のような発展史観に立つハルトマンへの批判と、密接に関連している。ニーチェは、生の無味乾燥性・画一化・現在の荒廃の哲学的展開をハルトマンの中に見る。ニーチェは、ハルトマンの次のような言葉を引用している。「生への意志の肯定は、さしあたって唯一正当なものとして宣言される。けだし、臆病な個人的諦念や退却のうちにはなく、生及び生の苦痛に対する完全な帰依によってのみ、世界過程のために何らかの寄与をなしうるのである。」ハルトマンの哲学は、「個人的な意志否定への努力は、自殺と同様に愚かなことである。」という点からすれば、たしかに生への意志を肯定している。しかしそれは、ニーチェにとつて「倦怠(Basistheit)の哲学」に他ならない。「人類を倦怠に導くことが、ハルトマンの目的である。次の目標は、自殺、しかも多くの人間による自殺である。そして世界は、転倒し、再び虚無の海に沈没する。それに続く世代の使命は、世界過程に帰依することによって、生への意志を肯定することによって、倦怠を導入することになる。」

ハルトマン哲学の生の肯定は、ニーチェの生の肯定と、いわば対極にあるといえよう。「世界は、前進しなければならぬ。あの理想状態は、夢想しているだけでは獲得されない。闘い、勝ち取らねばならない。そして、救済への道、人をあやまらすフクロウの生真面目さからのあの救済の道は、晴朗さを通じて

のみ至りうる。それは、人が世界過程やあるいは人類の歴史のすべての構想を賢明にも拒む時代、もはや大衆は顧みられず、生成の荒涼たる流れの上に橋を架ける個人が再び顧みられる時代となる。生成を越えた共同作業を許す歴史のおかげで、個人は、過程などというものを継続するのではなく、無時間的・同時代的に生きる。<sup>23)</sup>

ニーチェにとつて生への意志の肯定は、ハルトマンにおける「堅実な中産階級の凡庸性」<sup>24)</sup>ではない。そうではなく、自らの没落をも辞さない強い意志の表れとなる。「個人が、何のために存在するのか。これを自ら問うてみよ。そして、他の誰も答えることができなければ、自ら一つの目的を、目標を、一つの〈そのために〉を、一つの高貴な〈そのために〉を立てることによって、自らの生存の意味をいわば後天的に正当化するように、一度でも試みたまえ。その目的のために没落したまえ、一偉大で不可能なもののために、偉大な魂を惜しまずに没落すること以上にすばらしい生の目的を知らない」<sup>25)</sup>このことから明らかのように、ニーチェにとつて生存の意味を与えるのは自分自身であり、「世界過程への人格の完全な帰依」<sup>26)</sup>によって獲得されはしない。すなわち、ハルトマンに対するニーチェの第二の批判点は、ともに生への意志を肯定しはするが、その肯定のあり方の根本的な相違といえるのである。

## (二) ニーチェ思想後期におけるハルトマンへの言及

ニーチェの後期思想におけるハルトマンへの言及は、『力へ

の意志』で異同を問題にした、先の諸断片に典型的にあらわれている。それは、ハルトマン哲学をベシミズムの哲学と関連づけている点である。後期思想でのハルトマン批判の特徴は、明白に自覚化されてきたこの観点に基づくことにある。なお、この観点は、本稿第二節におけるようなグロースオクターフ版『力への意志』の断片と、それに対応するグロイター版断片の異同を示すことによって、初めて明らかになる。ニーチェは、§§[IV] (一)で、「相変わらず幸福主義の支配のもとでだが、ショーペンハウアーとともに、問題は価値の決定にあるという哲学者の課題が明らかになってくる(ハルトマンへの嘲笑。ベシミズムの理想。)」と語り、ショーペンハウアーとともにハルトマンの哲学をベシミズムの問題圏で考えている。<sup>27)</sup>§§[VI] (三)では、「生存そのものに伴う快・不快を秤量しようと試みるあのベシミズム、前コペルニクスの狭隘な視野へと意図的に自己を幽閉するあのベシミズムは、時代遅れの退行である。」と、ハルトマンのベシミズムを痛烈に批判する。さらに、「ニーチェは、「世界は、存在するよりも存在しない方がましだ。」<sup>28)</sup>とするハルトマンに、生の貧困化への道を見ている。「私は、このような感受性のベシミズムを軽蔑する。このベシミズムは、それ自体生が貧困化している徴候である。私はハルトマンのような瘦せた猿が〈哲学的ベシミズム〉について語るのをけっして許さない。」<sup>29)</sup>

だが、後期思想におけるハルトマン批判においては、ハルトマンへの批判の舌鋒ばかりでなく、むしろそこにはニーチェ自



身の哲学がはのめいてくるように思われる。36[49](Ⅲ)の断片においてニーチェは、「私は、エドワルト・フォン・ハルトマンをペシミズムを先の先まで考えた者とみなさない。」と語るが、そこにニーチェ自身の哲学の対象、すなわち「先の先まで考えられたニヒリズム」の問題が浮かび上がる。ニーチェは、これに次のように続けている。「私の『悲劇の誕生』の至るところから響いてくるような) 神も道徳もなしに) 一人で生きるといふ、極端なペシミズムに耐えるためには、私は、それと正反対のものを考えねばならなかった。」

ここでニーチェは、いみじくも「極端なペシミズム」(extremar Pessimismus)の語をあげているが、神も道徳もなしで一人生きるといふこのペシミズムは、けっしてハルトマン的な「世界過程への人格の完全な帰依」によつては、解決されないものである。ニーチェ自身自らの視圏下においてすでに捉えていると思われるが、このペシミズムは、ニヒリズムの問題として捉えられねばならない。ニーチェが『反時代的考察』においてふれた、「虚無の海や現在の荒廃」は、まさしくこうしたニヒリズムの問題状況下において明確にされるのである。

#### 四 まとめ

以上、ハルトマンに対するニーチェの言及を、『反時代的考察』を中心とする前期思想と、『ツアラトウストラ』以降の後期思想との間で比較を試みた。確かに、考察の対象をハルトマンに対するニーチェの言及とすることによって、ニーチェ自身

の思想を捉えるには不十分であったかもしれない。しかし、前期思想に見出したハルトマン批判が、後期思想においては、ペシミズムの問題としてニーチェ自身の視圏下で自覚化され、捉え直された、と言うことはできよう。特に、それは、前期思想において示したハルトマン批判の第二の点について言うことができる。すなわち、ニーチェは、前期思想において「生への意志の肯定のあり方」の相違を批判したが、後期思想においては、ペシミズムの問題として捉え、さらにはニヒリズムの問題の萌芽をそこに見ているということである。

では、前期思想におけるハルトマン批判の第一の点―発展史観への批判は、後期思想においてどのように展開されたのだろうか。この点に関しては、後期思想の中にハルトマンへの言及を見出すことはできなかった。しかしこの問題は、ハルトマンへの言及という資料的限界を越える意味を持っている。なぜなら、発展史観に対する循環史観という図式において、後期思想における「永遠回帰」思想の位置づけが明確になるからである。こうした意味において、前期思想における発展史観批判が、後期思想における「永遠回帰」思想の提示として自覚化されることは、容易に理解されるであろうと思われる。とはいえこの問題は、ハルトマンとニーチェの問題ではなく、ニーチェにおける思想発展の問題として考えられねばならない。

また、われわれはこれまでハルトマンという一人の哲学者に対するニーチェの批判を考察してきたが、これらの批判は、はたしてハルトマン個人の固有性に対する批判にすぎなかったの

であろうか。あるいは、同時代の哲学的思想的状況へのニーチェの批判であったのであろうか。その批判は、歴史主義哲学よりも全近代の知への、ハルトマン個人よりも全同時代人への批判ではなかったのであろうか。

## 註

本稿で用いるニーチェのテキストは、『*Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe* (KGW), Hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin 1967ff.』である。引用個所は、AbteilungとBandをそれぞれローマ数字とアラビア数字で表し、その後に頁数を示す。なお引用文中の強調文字は、原文におけるクシェルトの部分を示している。「」は、引用者の補足である。

- (1) KLoewith, *Nietzsches Philosophie der Eigenenueckerkehr des Gleichen* 35f. 『ツァラトウストラ』以降の時期に公刊された著作、及び遺稿群に見出される思想である。
- (2) グロスオクターフ版『力への意志』所収の断片の多くに、削除・付加・移動・置換・分割の事例を指摘することができる。その詳細については、以下の拙論を参照していただきたい。『力への意志』の構成について(一)『倫理学』第四号 一九八六年 四九～五八頁。
- (3) 「削除」とは、グロイター版の断片にみられる言葉が、グロスオクターフ版『力への意志』では削除されているこ

とを意味する。

- (4) 「移動」は、グロイター版とグロスオクターフ版とでは、言葉のうえで変化はないが、その並びに変更があることを示している。

- (5) ニーチェの思想的特質を探るとき、歴史上実在する人物に對する彼の言及を考察することは、きわめて有益である。というのも、いわばその言及を鏡としてニーチェ自身の思想展開の一端を理解することが可能といえるからである。参照拙論「ニーチェのソクラテス像」『筑波大学哲学・思想論叢』第二号 一九八五年 七三～八四頁。

- (6) Vgl. E. v. Hartmann, *Philosophie des Unbewussten*, Berlin 1882, Bd. I s. XXIV, s. 10f, Bd. II s.413, s. 415, s. 429f.
- (7) Ebd. s. 295.
- (8) Ebd. s. 355.
- (9) Ebd. s. 368.
- (10) Ebd. s. 402f.
- (11) 2[206] (Ⅱ)の標記は、グロイター版第八巻の第二群第二〇六番目の断片であることを表している。
- (12) KGW, III, s. 318
- (13) 29[52] (III)
- (14) Ebd.
- (15) Ebd.
- (16) 29[53] (III)
- (17) 29[48] (III). なおハルトマンは、歴史を幼年期・青年期・

壮年期と区別し、引用箇所と異なるが、ニーチェがハルトマンの「幻想の三段階説」を念頭に置いていることはいうまでもないであろう。

- (18) KGW. III, s. 309.
- (19) 29 [51] (III)
- (20) Hartmann, a. a. O. s. 403.
- (21) Ebd. s. 399.
- (22) 29 [52] (III)
- (23) Hartmann, a. a. O. s. 380.
- (24) KGW. III, s. 315.
- (25) 11 [61] (VII)
- (26) Ebd.

(かんの・たかひこ 筑波大学大学院 哲学・思想研究科在学中)